



# JACET-Chubu Newsletter

一般社団法人 大学英語教育学会中部支部 No. 45

## 2020年度中部支部大会報告 —オンライン時代における大学英語教育—

支部長 石川有香  
(名古屋工業大学)

中部支部では、これまで、毎年6月に支部大会を開催してまいりましたが、2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から対面での開催を見送ることとなり、代わって、9月12日にオンラインにて支部大会を開催いたしました。すでに、4月より多くの大学でオンラインを活用した英語教育が行われていたこともあり、本大会テーマを「オンライン時代における大学英語教育—今、大学教員にできること—」といたしました。

いつもより3か月遅れて開催された大会ではありましたが、海外よりご参加いただいた2名の研究者による特別講演と14本の研究発表が行われ、充実した内容となりました。支部内外から100名の先生方にご参加いただきました。

特別講演では、まず、Hankuk University of Foreign StudiesのHaedong KIM教授が、“A New Normal in Tertiary English Education in Korea in the COVID-19 Era”のタイトルで、日本よりも一足早く始まった韓国の大学入試改革と、コロナ禍の大学英語教育でのオンライン活用の現状を、データを交えて詳細にお話いただきました。

韓国では、英語学習への過熱が社会問題となり、相次いで教育制度改革が行なわれ、入試も相対評価から絶対評価へと移行しています。その結果、全体としては、試験対策を中心とした英語学習への偏った意識を改めることはできたものの、最上位クラスの学習者数が減少し、英語を専攻する学生の数も2014年から2018年までに26%減ったとされます。

こうした中、コロナ禍に見舞われた大学英語教育では、日本と同様、オンライン授業が長引きました。韓国の学生の授業満足度は、春の84%から夏には50%に低下し、オンライン授業は対面授業よりも効果が低いと考える学生が56%に上がったと言います。

韓国では、初等教育・中等教育において、オンラインを活用した英語教育が盛んに行なわれていますが、それでも、大学生のアンケートによって、人と人とのコミュニケーションが実感できる「対面授業」が強く求められていたことが分かったとされます。アンケートでは、何らかの形で対面学習を取り入れた「ミックス方式」

### 目次

2020年度中部支部大会報告 —オンライン時代における大学英語教育— 石川有香	1頁
講演会報告 1 今井隆夫氏 「学習者の認知能力を活性化する英語学習法」 藤原康弘	3頁
講演会報告 2 柴田美紀氏 「『国際共通語』の解釈を考える—英語教育は何を目指すのか」 Leah Gilner	4頁
会員著書紹介 柴田美紀・仲潔・藤原康弘 著 『英語教育のための国際英語論』 塩澤正	5頁
事務局より	7頁

の授業評価が最も高く、次に、ビデオ映像を用いた「オンデマンド方式」となり、最も評価が低かったのは、音声のみの「オンデマンド方式」だったそうです。

Shandon University の Junju WANG 教授には、“New Reforms of Higher English Education in China” のタイトルで、中国で 2018 年より継続的に行われている英語教育改革と 2020 年 4 月に公示されたばかりの国家的英語教育ガイドラインについて、詳細な解説をいただきました。英語専攻だけではなく非英語専攻の学生に対しても、明確な目的の下で、大学英語教育のカリキュラム、教材、評価などの基準が定められているとされます。

工学や医学の分野での国際競争が激しくなっている中で、学部教育においては、むしろ、狭い範囲の専門教育に閉じこもるのではなく、刻々と変化する社会のニーズを捉えることができる広い視野を持った人間の教育に重点を置いているという点が興味深く感じられました。大学では、学際的・革新的な教育が求められており、教員は、各自の研究だけではなく、学部教育に寄与することが不可欠となっているとされます。国家が求める英語教育も、「英語」そのものの知識・技能にとどまらず、文学や文化、地域社会事情を含みます。また、English plus として、英語以外の外国語教育も求められており、教養を高める、「新しい」人文学系教育が展開されているとのことでした。

韓国の場合も、中国の場合も、コロナ禍による変化だけではなく、国家規模での英語教育

観・大学教育観・人間教育観の変化を感じる大きな教育改革が行われているように思いました。日本の大学英語教育を考える上でも、示唆に富んだご講演でした。

3 つのセッションに分かれた研究発表では、それぞれ、オンラインを駆使した授業実践やその効果についての分析報告、最新の英語教育研究の成果を伺うことができました。中部支部にとって初めてのオンライン開催の大会でしたので、運営方法や質疑応答の方法について不安もありましたが、オンラインながらも、ご参加をいただいた先生方と、共通の課題について議論を交わすことができました。また、終了後の懇親会でも情報交換が行なわれ、例年に劣らない、有意義な時間となりました。

コロナ禍で先生方と直接交流する時間が失われましたが、遠方の先生方にもご参加いただき、新たな知己を得ることができました。従来の対面授業では看過されてきた学習傾向を調査する機会ともなりました。

オンラインの活用は、今後、大学英語教育の現場においても、また、英語教育研究においても、さらには、学会や大会の運営においても、ますます重要性を増してくることが予想されます。2021 年度は、また、6 月に、支部大会の開催を予定しております。先生方とオンラインでお会いできますことを楽しみにしております。

最後になりましたが、コロナ禍の中、本大会でご講演・ご発表いただきました先生方、ご参加いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

 <b>成美堂 2021 年度 新刊のご案内</b>		<small>〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22 TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490</small>	
Live Escalate Book 1: Base Camp.....	2,500 円(税別)	Healthy Habits for a Better Life .....	1,900 円(税別)
Live Escalate Book 2: Trekking.....	2,500 円(税別)	CBS NewsBreak 5.....	2,400 円(税別)
Success with Reading Book 3 -Boost Your Reading Skills-.....	2,500 円(税別)	AFP SciTech Futures.....	2,500 円(税別)
Listen Up, Talk Back Book 2 -English for Everyday Communication-.....	2,300 円(税別)	BEST PRACTICE FOR THE TOEIC® L&R TEST -BASIC-.....	2,200 円(税別)
Global Issues -An Introduction to Discussion Skills-.....	2,200 円(税別)	PROGRESSIVE STRATEGY FOR THE TOEIC® L&R TEST ...	2,000 円(税別)
Let's Read Aloud & Learn English: Going Abroad ...	2,200 円(税別)	Grand Tour - Seeing the World .....	1,900 円(税別)
Living Grammar -New Edition-.....	1,900 円(税別)	Meet the World 2021 -English through Newspapers-.....	2,000 円(税別)
Science Arena .....	1,900 円(税別)	Medical World Walkabout.....	2,500 円(税別)
		 <b>SEIBIDO</b>	<small>URL: <a href="http://www.seibido.co.jp">http://www.seibido.co.jp</a> e-mail: <a href="mailto:seibido@seibido.co.jp">seibido@seibido.co.jp</a></small>

## 講演会報告 I

中部支部 2020 年度講演会

「学習者の認知能力を活性化する英語学習法」

今井隆夫(南山大学教授)

2020 年 10 月 17 日

[Zoom 開催]

“I have a black thumb.” みなさんはこの表現をご存じだろうか。こちらは、“I have a green thumb” (園芸に長けている) から派生したもので、「園芸の才がない」を意味する。このように人間は、既存の表現を基にさまざまな認知能力を働かせて、言語を発達させてきた。今井先生の本講演では、このような認知能力を活性化させ、英語学習を促進する方法が紹介された。

まずタイトルでもある「学習者の認知能力を活性化する英語学習法」を「認知能力(比喻能力、アナロジー、スキーマ化と事例化、精緻度の調整、参照点能力など)を活性化するように、問いかけ形式を用いた、アクティブラーニング」と定義された。そして各認知プロセスに応じて、具体的な問いかけの事例を示された。

たとえば冒頭の“green thumb” → “black thumb” はスキーマ化と事例化のケースである。他にも “I’m between jobs” (仕事と仕事の間 → 休職中) から、“I’m between girlfriends” (恋人募集中) などのアナロジーのケースを紹介された。“I’m between -s” は派生力が高く、さまざまな表現を生みそうである。たとえば between schools (浪人中)、between husbands (再婚の意思あり) などが考えられる。人間の

発想は本当に面白い。

また日英語におけるカテゴリーの違いに意識を高める問いなども紹介された。たとえば “How many fingers do you have?” と問う。そうすると、20 本(手と足の指すべて)、18 本(手の親指(thumb)を除く)、16 本(手足の親指を除く)、10 本(手の指のみ)、8 本(手の指のみで親指を除く)など、さまざまな返答があるだろう。日本語では手足の指をすべてカウントして、20 本と考えるのが一般的と思われる。しかし英語は 8 fingers, 2 thumbs, 10 toes となる。このように世界の認知の仕方の違いへ意識を高め、英語の発想を学ばせる。この発問は小学校から大学まで使えそうである。

その他、「昨日花見に行ってきた」という「花」は日本語では当然「桜」を指すが、英語では “flowers” ではなく “cherry blossoms” と具体的に言わねばならない。そのことに気づかせるために、その事実をただ一方的に説明するのではなく、「昨日花見に行ってきた」を英語で “I went to see flowers yesterday” と表現すると(英語)ネイティブはどう答えるか? などと問いかけて、学習者に考えさせる方法を勧められた。本当に豊富な例を短い時間で紹介されており、学びの多い講演であった。

筆者は、日本語母語話者と英語母語話者の認知の違いに意識を高めることの重要性に異論はないが、その認知の違いをどこまで「矯正」しなければならないかについて考えさせられた。たとえば指の数は、世界の英語使用者の平均的な認知においては、20 の方が「自

# VELC Test<sup>®</sup> Online [ベルクテスト・オンライン]

## Visualizing English Language Competency Test Online

VELC テストにスマホ、タブレット、PC で受験可能なオンライン版が登場しました。  
是非、デモ版をご体験ください。



詳しくはこちら

VELC 研究会事務局 (株式会社金星堂内)  
東京都千代田区神田神保町 3-21 (〒101-0051)  
電話 03-3263-3828 / FAX 03-3263-0716  
e-mail info@velctest.org <https://www.velctest.org/>

然」ではないだろうか。

また比喩能力、アナロジー、カテゴリー化に関しては、世界のさまざまな英語使用者は彼らの「認知能力」を駆使して、新表現を生み出し続けている。認知言語学では、母語話者以外の英語使用者の創造的な言語使用も同様に評価しているのだろうか。

とはいえ、確かにどこまでの認知把握の創造性を第二言語話者に認めるか、は難しい話でもある。またもっといえば、国際的な英語使用の状況や英語に期待されている役割を考えると、第一言語話者にどこまでの認知把握を認めるかも考えていくべき課題である。たとえば“green”であれ“black”であれ、そのような“thumb”の表現を世界の英語話者が共有することを期待していいのだろうか。

本質的に言えば、おそらく多くの認知プロセスにおいて、普遍的に共有しているものも多々あるだろう(見上げる→尊敬など)。人間の認知能力に焦点を当てた、今後の英語教育の在り方を考えさせられるご講演であった。

藤原康弘(名城大学)

## 講演会報告 2

### 中部支部 2020 年度講演会

「『国際共通語』の解釈を考える—英語教育は何を目指すのか」

柴田美紀(広島大学教授)

2020 年 10 月 17 日

[Zoom 開催]

Professor Miki SHIBATA (Hiroshima University) addressed interpretations of English as an International Language (EIL) and issues related to English language teaching (ELT). The presentation opened with a review of prevalent frameworks including Widdowson's (1997) formulation of fundamental considerations underlying communicative capabilities and the Three Circles model which has

developed based on Braj Kachru's seminal work.

The shift in the perception of English norms from the native/non-native speaker dichotomy toward multilingual users and plurilingual interactions was used to situate the central concern of the presentation: the teacher's dilemma of whose English to use as a pedagogical model. Listeners were reminded of the three options outlined by Matsuda and Friedrich (2012), namely, devising an international standard variety, teaching the local variety, and adopting an established normative standard before being encouraged to consider how these options fit with the widespread function of English as a global communication tool. Successful communication involves the negotiation of shared resources among the interactants, who naturally draw on their personal language repertoires to express themselves. Prof. Shibata suggested that the notion of human ecology language teaching (Levine, 2020) captures some of the complexities related to the motivations and goals of contemporary ELT, which are ultimately rooted in helping learners make effective use of all of their languages as proposed by 大津 (2010).

Leah Gilner(愛知大学)

## 会員著書紹介

柴田美紀・仲潔・藤原康弘 著

『英語教育のための国際英語論』

2020年9月発行(大修館書店、197頁)

一気に引き込まれて、最後まで通読してしまった。途中で何度か「そうそう、その通り」とつぶやいた。この本は専門書でありながら、エッセイ集のように読者(教員)に寄り添いながら、語りかけてくる。それは、文章が読みやすいというより、本支部の藤原氏を含む著者3名の専門家としての深い見識と熱い英語教育に対する想いが、読者を丁寧にかつ力強く納得させるからだろう。

「国際英語論」を冠した著書はすでに世の中にいくつかあるが、『英語教育のための国際英語論』は、1冊全体が「英語教育」に関連するという点で画期的である。「国際英語論は理解しますけど、私の授業でどうしたらいいのですか?」と言う「普通の教員の素朴な疑問」に正面から答えている。それも、実践例を示すという形式ではなく、その「考え方」を示している点がいい。つまり、それぞれの教員の置かれた環境で応用が利くのだ。しかも、その多くは、学習者中心の授業、つまり今どきの(英語教育の世界では、昔から当たり前の)アクティブラーニング(participatory teaching)を基本としている。帰納的に教材を提示し、授業内の学習者の関わりを高め、自ら発見・考えさせることを基本とした言語活動の提案である。これは著者の3名が研究者であると同時に教育者であるという意識が非常に高いため、自然とこのような形になったのだろう。

また、本書は教育を常に視野に入れながらも、中身は国際英語論(主にWEとELF)に関する基本的な重要情報を押さえながら、最新の学術的知見で溢れている。ヨーロッパで広まった複言語主義の考え方、つまり言語能力を自己の中にある複数の言語能力の総体と考えるトランスランゲージやマルチコンピテンスという概念、コミュニケーション能力=「対話力」、言語観と言語差別、社会構築主義的能力観など、注目の考え方や新しい学問領域に

も触れている。具体的研究の紹介も多い。その意味で、今後国際英語論に関心を持つ大学院生や研究者にもぜひ一読を進めたい一冊である。国際英語論の基本的概念とその周辺の課題、それにその教育的な意義と応用などを専門家3名がまとめたという意味で、この分野の本格的な「基本図書」と言っても過言ではない。

さらにこの本が読み応えがあるのは、「国際共通語としての英語」の落とし穴や日本における言語のバラエティーの概念の欠如、英語教育観の反グローバル性の問題まで扱っている点である。つまり、国際英語論を社会との関係でマクロに捉え、その課題までも視野に入れている点がこの本に厚みと深みを与えている。グローバル化というなら、英語だけ教えていいのかわ、英語のバラエティーだけ考えていいのかわ、というような国際英語論の背後にある声にも応えている。言語権、言語差別、アイデンティティー、対話力としてのコミュニケーション能力、世界の言語間の不平等、英語帝国主義と国際英語論との関係などは、すべての英語教員が再度考えてみる必要がある問題であろう。本書はその議論のきっかけを提供してくれる。

本書はマーカーで印をつけたい名言(的一節)に溢れている。やや長くなるがいくつか紹介しておきたい。この本の熱が伝わるのでないだろうか。「言語は人と人とを結ぶだけでなく、分断する」(p.3)、「言語は自然な産物ではなく人為的/政治的な産物である」(p.24)、「ネイティブ対ノンネイティブの(無)意味」(p.42)、「どこが間違っているかではなく、なんとか効果的に目標言語を使おうとしている創造的使用をもっと評価すべき」(p.47)、「標準英語自体が人為的な選択であるから、言語的に中立な「標準英語」は存在しない」(p.65)、「まず言語そのものの多様性を認識し、次いで「英語」の多様性を認識すべき」(p.11)、「耳からインプットとして指導する発音と、生徒が発話する発音は同じにならない」(p.66)、「コミュニケーションは歩み寄りにより達成される」(p.80)、「風の便りでは、、、」は

“I hear from the wind that…”もアリ」(p.82)、「あなたの素晴らしい奥様、、、」は“your delicious wife”で怒ってはいけない」(p.69)、「共通語としての英語が必ずしも容易に総合理解をもたらすわけではない」(p.89)、「コミュニケーション能力とは「対話力」」(p.98)、「日本文化について発信しよう」という行為がむしろ文化に対するステレオタイプを形成する」(p.108)、「L1の使用や三単現のsの欠落」は方略的能力からみれば、むしろ加点評価である」(p.128)、「ネイティブらしさではなく、通じやすさで評価したい」(p.134)、「英語教師には、学習者の「言語文化観」をゆさぶり、豊かにする責務がある」(p.139)、「授業は英語で」は「ガラパゴス的」な教授法」(p.162)、「互いに分かり合えないのであれば、その責任はどちらか一方にあるのではなく、双方にある」(p.168)、「英語が使える反グローバル人材を育ててはいけない」(p.164)、「言語(英語)が差別を生んでいるという事実気づこう」(p.173)等々である。社会言語学や国際英語論にかかわる研究者らは「よくぞ言ってくれた」と膝を打つに違いない。

最後に本書の10章からなる全体構成を紹介しておきたい。

まず、第1章「国際共通語としての英語の社会的意義」と第2章「変わりゆく言語」では言語と社会の関係を論じている。ここで「国際共通語としての英語」の危うさや英語だけでなく「言語」自体の多様性や「言語の機能」の多様性までを探る必要性を主張し、国際英語論の社会の中の立ち位置を確認する。第3章「英語の諸相」は主に国際英語論の基本的概念のおさらいであるが、いまなぜ国際英語論の考え方が日本の英語教育に必要かという観点からまとめてある点が新しい。マルチコンピテンスなどの新しい概念の紹介もある。

第4章「アクセントと言語態度」と第5章「英語の多様性と共通性」は英語使用者に焦点をあてている。4章では、アクセント(なまり)が否定的な言語観形成の原因であることを、豊富な研究データを用いながら紹介する。第

5章では、コーパスからの実例を紹介しながら、母語話者の規範を逸脱しても、コミュニケーションが円滑に進むことを示す。説得力のある事例が多い。

第6章「分からないからこそ対話力」、第7章「対話としての英語コミュニケーション」は、「対話力」という新しい概念のもとに、国際共通語としての英語を使用したコミュニケーションとは、「歩み寄り」と「意味交渉」がキーであり、今後重要な概念になることを主張する。

第8章「言語コミュニケーション力の評価」、第9章「国際共通語としての英語」の指導」は、日本の英語教育の向かう方向性と国際英語論の観点からみた評価について、考え方の基本と実践方法を具体的に示している。特に評価論と国際英語論の関係においては、今まで日本でのコンテキストに対応する研究が少なかったもので、貴重な提言である。

第10章「グローバル人材の言語力」は、総括としてグローバル人材と英語力の関係について考察している。「グローバル社会なら英語ぐらいは使えるはずだ」と考えるような「英語が使える反グローバル人材」は、国際英語論とは一線を画すことに触れ、巷の(母語話者崇拜的な)英語ブームに釘をさすことを忘れない。

長くなった。まとめたい。この著書は国際英語論の研究分野の第一線で活躍する専門家3名、柴田美紀氏(広島大学)、仲潔氏(岐阜大学)、藤原康弘氏(名城大学)による国際英語論と教育の関係を著した本格的な学術書である。3名とも中部地区出身、あるいは中部地区に勤務地があり、本支部とは関りが深い。基本的な重要事項をまとめながらも、最新の研究成果と課題に触れ、さらに英語教育者への熱いメッセージが込められている。国際英語論の基本的な考え方が世の中に浸透した今、「次に考えることは何か」という点で貴重な指針を与えてくれる。その道の専門家らが構想から出版まで5年をかけた“a solid book”である。英語観、教育観、コミュニケーション観を根本から考え直すとてもよい契機を与えてくれることは間違いない。英語教育に関わる全

ての人々に読んでもらいたい。絶賛する。

なお、『英語教育』12月号(p.93)(大修館書店)には、この分野をリードする大阪大学の日野信行氏の書評もある。合わせて読んでいただきたい。

塩澤正(中部大学)

#### 掲示板

『JACET 中部支部紀要』第19号への掲載論文の投稿(学術論文、研究ノート、実践報告、書評)を募集します。奮ってご応募ください。

締切: 2021年9月20日  
刊行予定: 2021年12月  
掲載料: 刷り上がり1ページにつき、  
1,000円の負担  
問合せ: JACET 中部支部事務局

投稿方法等の詳細については中部支部ホームページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

### 事務局より

#### ◆ 2020年度春季定例研究会のお知らせ

2020年度春季定例研究会を2021年3月6日(土)14時よりオンラインにて開催します。詳細はJACET 中部支部ホームページをご覧ください。

#### ◆ 新入会員のご紹介

2020年6月から2020年12月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。(敬称略、入会順)

大東 万里絵(北陸大学)  
島田 祥之介(名城大学[学])  
邢 云(名古屋大学[院])

マーシャル マイケル(東海学園大学[非])  
菅野 雅代(仙台高等専門学校)  
清川 シヤノン(桜花学園大学)  
クラーク ドノバン(桜花学園大学)  
竹迫 和美(テンプル大学日本校[院])  
ヴァーラ 内田 エイドリアン(日本大学)  
澤崎 宏一(静岡県立大学)  
天野 直亮(University of Oxford[院])  
クーパー トッド(富山大学)  
阿部 大輔(中部大学)  
中川 右也(三重大学)

#### ◆ 支部長選挙開票結果

中部支部長選挙管理委員会より、2021年度中部支部長・副支部長選挙(信任投票)の開票結果について報告がありました。11月21日(土)に投票を締切り、11月25日(水)に開票が行なわれました。開票結果は以下のとおりです。

投票数 92票、無効票 1票  
今井隆夫支部長候補信任票 89票  
安達理恵副支部長候補信任票 86票

次期支部長は今井隆夫氏(南山大学)、副支部長は安達理恵氏(椋山女学園大学)となります。任期は2年です。

#### ◆ 2020年度 第2回支部総会報告

12月5日(土)に開催された第2回支部総会で2021年度事業計画及び予算案と人事案が了承されました。

#### 1. 2021年度中部支部事業計画

- (1) 第36回 中部支部大会  
日時: 2021年6月12日(予定)
- (2) 中部支部講演会  
日時: 2021年10月16日(予定)
- (3) 中部支部 第1回/第2回定例研究会  
日時: 2021年12月4日/2022年3月5日(予定)
- (4) 『中部支部紀要』第19号  
日時: 2021年12月25日刊行(予定)
- (5) JACET-Chubu Newsletter  
No.46: 2021年5月20日発行(予定)  
No.47: 2021年12月20日発行(予定)

(6) 支部総会

第1回支部総会 2021年6月12日(予定)

第2回支部総会 2021年12月4日(予定)

2. 2021年度 支部人事

顧問： 倉橋洋子(東海学園大学名誉教授)

田中春美(南山大学名誉教授)

吉川寛(中京大学)

理事：6月まで石川有香(名古屋工業大学)

6月より今井隆夫(南山大学)

支部長：今井隆夫(南山大学)

副支部長：安達理恵(椋山女学園大学)

支部幹事：吉川りさ(名古屋工業大学)[事務局]

藤田賢(愛知学院大学)[会計担当]

地村みゆき(愛知大学)

研究企画委員(25名)

安達理恵(椋山女学園大学)、藤田賢(愛

知学院大学)、藤原康弘(名城大学)、

今井隆夫(南山大学)、石川有香(名古屋

工業大学)、伊東田恵(豊田工業大学)、

地村みゆき(愛知大学)、河原俊昭(岐阜

女子大学)、木村友保(名古屋外国語大学

名誉教授)、小宮富子(岡崎女子短期大学)、

倉橋洋子(東海学園大学名誉教授)、

三上仁志(中部大学)、大石晴美(岐阜聖

徳学園大学)、岡戸浩子(名城大学)、

大森裕實(愛知県立大学)、大瀧綾乃(静

岡大学)、梁志鋭(豊橋技術科学大学)、

佐藤雄大(名古屋外国語大学)、下内充(中

部学院大学)、塩澤正(中部大学)、

白畑知彦(静岡大学)、杉浦正利(名古屋

大学)、鈴木達也(南山大学)、吉川寛(中

京大学)、吉川りさ(名古屋工業大学)

正式就任は2021年6月定時社員総会后、

任期は2年になります。

◆ JACET 第60回記念国際大会のご案内

JACETは2022年に創立60周年を迎えます。その先駆けとして、2021年度の第60回記念国際大会は第48回サマーセミナーと連続して行い、「JACET 創立60周年記念ウィーク」としてオンラインでの同時期(2021年8月25日(水)~29日(日))開催となります。

JACET 第60回記念国際大会

2021年8月27日(金)~29日(日)

大会テーマ

「時代の変化を乗り越える英語教育—

Society 5.0という現実を迎えて」

English Language Education to

Endure Changing Times: Facing the

Reality of Society 5.0

◆事務局移転のお知らせ

2021年4月より中部支部事務局は移転します。

新事務局

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町

名古屋工業大学 吉川りさ研究室内

E-mail: yoshikawa.lisa@nitech.ac.jp

◆住所変更届提出のお願い

支部会員みなさまに、紀要やNewsletterなどの郵便物をお届けできない事例が増えています。お手数ですが、転居の際には、JACET本部事務局と中部支部事務局の両方に、住所変更届をご提出ください。

JACET 中部支部事務局

〒468-8511 愛知県名古屋市天白区

久方二丁目12-1

豊田工業大学 伊東田恵研究室内

E-mail: tae@toyota-ti.ac.jp

JACET-Chubu Newsletter No. 45

2020年12月20日発行

発行者：一般社団法人 大学英語教育学会

中部支部 (代表)石川有香

編集者：伊東田恵、藤原康弘、

吉川りさ